

京鹿子

昭和二十三年九月十日第三種郵便物認可
平成二十二年七月一日発行
通巻一〇三十一号(毎月一回)二頁発行

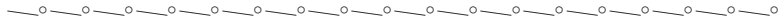
7月号

夏期吟旅特集号

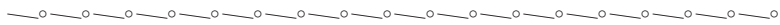
豊 田 都 峰
漣響集 その十一

雲歩きまた走りして芽木せかす
春光とならんしぶきをちらし翔つ
花びらの川越えつひにかなはざる
ひとすぢのはなびらの果て知らずとす
花びらのいくいくすぢの風もやう
音たてて若葉する園奥さそふ



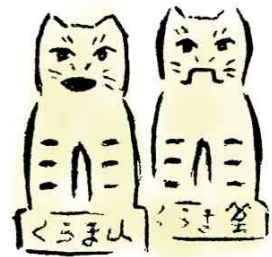


花の奥憤怒相なる仏たち
半眼を解かぬや花の絶ゆるとも
呪文満つ御堂真中の花曼陀羅
蝌蚪の尾に日がたはむれてひとひねり
貌ひとつ取り残さるる蝌蚪の水
また日の斑遊びにきてゐる豆の花
燕来て大路小路をひき直す
若葉なる表紙めくれば若葉なる



雀の涙 丸山佳子

理由なく好きにならせた雀の枕
どの幹にふれても蟬を待つてゐる
山の事話せば長いはや七月
鴨の恋一途見てゐるお人好し
衣更で私の果報はペン一本



秀華採集

地平まで跳んでみたくて春帽子

山中 志津子

自分の思いをものに託すのは常道。その時の重要な心掛けは譬えの対象の選択であるが、特に季語の選択は大いに心掛けてほしい。この場合の「春帽子」は秀逸。

見ぬかれてゐるものしや春霞

荻野 千枝

霜柱細菌病理研究所

佐藤 真隆

隠れているのも安心だが、逆に作品のように「見ぬかれて」いるのもよく、「春霞」がよい。後句の季語と建築所名との組合せに納得がゆく。大胆な取組を大いに勧めたい。

夏季吟旅特別吟抄

豊田都峰

白峰遍路みち

蝶ひとつあをい心に海を越ゆ
南風岬村上水軍の舟飛びゆく
著莪の径細く土墳もなき山陵
地の涯は白峰いくたび春逝きし
流帝陵京の春風たてまつる
流帝へ花のみやびの散りもやう
還るなき春落葉積む白峰陵
わくらの葉の降りつぎ白峰山晴れず



鈴鹿 仁

牛吼ゆる

桐咲いて遠望の雲流さずに

通し鴨暮れゆくものに水の音

夏草や夢つなぐため雲流す

夏柳橋の向かうの灯のうるみ

牛吼ゆる八十八夜の農ごよみ

近 詠

和田 照海

子規庵

立てひざの子規の文机つばめくる

黄水仙子規終焉の六畳間

れんげうや病林六尺煤天井

ごたごたのものの芽庵主逝きてより

律のこゑばかり聞こえて地虫出づ



神麓集

養老滝 林 日圓
 元正の御代より今に養老滝
 賑はひて人の山なす滝開き
 滝の前立ちて心が清められ
 名高きは孝子伝説養老滝
 日本の滝百選に選ばれて

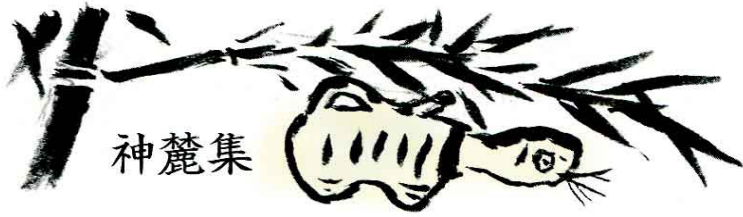
梅が香 北村 香朗
 梅が香や太極拳を試みる
 梅咲いて生涯の業太極拳
 紅白の色の豊かさ落椿
 椿落つただそれだけのことながら
 小便無用の小さき鳥居犬ふぐり

春の星 藤岡 紫水
 モナリザのまなざし遙か春の星
 夢に覚め夢にまた寝て大朝寝
 一灯を献じて花の闇を緊む
 そつけなき父子の別れ辻おぼろ
 日日太る那智の神滝山笑ふ

松田 都青
 ピンクにはもうなり切れぬ花疲れ
 計算の苦手な母のさくら餅
 余生とは押ししても引いても花曇
 亡き人をこんな形に春霞
 死ぬ力貯へてゐて茎立ちぬ

船越 美喜
 花時計植糸替へてゐる日永かな
 川岸に見らの探せる蝻蛙の紐
 種袋振りてみて買ふ常ながら
 豌豆の花ゆらすほどの風ありて
 スイートピー色とりどりに朝の卓

うららか 丹生をだまき
 糊利きしテーブルクロス春の宴
 うららかや「ダルマサンコロンダ」と遊ぶ声
 春眠の夢の私は女学生
 鳳凰が何時かは来ると桐の咲く
 毛を刈られ羊はこんなにも華著な



神麓集

夏めく 山田をがたま
 極殿の極彩色映ゆ大春野
 三笠山霞み平安遷都祭
 塔修理に寄進の写経若葉光
 夏めく陽いざ靴はきて外へ出む
 風は初夏リハビリの師と土を踏む

高木 智

鶯の二タ声聞こえ耳澄ます
 夕まぐれ来し鶯の鳴き止まず
 老鶯や日昏と声といづれ濃き
 菖蒲湯の穂先を胸に刺してみる
 薰風や三年で消ゆ脳腫瘍

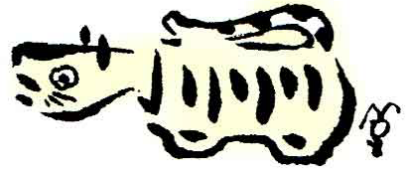
緑 蔭 竹貫 示 虹
 同穴を果さんとゆく炎天下
 許すとはおのれ高むる蓮の花
 もつてくる間もふつつとどぜう鍋
 波のあと穴の息する晩夏かな
 緑蔭をなす矜持あり楠大樹

服部 郁史
 覇道より王道を説き菜花忌
 蕙の香や昭和のしめり今もあり
 野を焼くや我が身の茶毘を重ね見る
 土佐みずきいとしき日々の縞木棉
 落花後の巢守るものゝ嘴鋭し

噴 井 丸井 巴 水

停泊の明かり流るる海霧の湾
 珈琲の浮力に甘ゆる汗の首
 縄文の火を囲みたる栄螺海女
 一杯の噴井で杜氏しめとせり
 神となる白塗り稚児の浦祭り

小堀 寛
 南京は北京の南春の夢
 花冷えやひとの声するしもうた屋
 花冷えや緋鯉にひそむ水のあり
 筍を盗るひとのかほ非売品
 妻といふ不思議なひとの春めきぬ



京鹿子集

豊田都峰選

京田 山中志津子

些事詰めて紙風船の弾みかな
沈丁花にむせて自分史改行す

地平まで跳んでみたくて春帽子

休日の画布へミモザを絞り出す

見ぬかれてゐるもたのしや春霞

みほとけの慈悲春光に反る一指

春愁の風が背なから降りてくる

春眠や届かぬ夢を夢に見て

霜柱細菌病理研究所

終章のぐらりとうごき涅槃変

亀鳴かせ座敷童のわるさ癖

耕すや青き煙につつまれて

赤青黄一斉に咲く春砂漠

子の入学思ひ出すこと二つ三つ

岩山の雪解け水は目減りせず

今日もまた発見一つ春荒野

窓々に囁り聞いて点滴す

参道の猫柳も梅もろう細工

入学式娘の背中へ父の愛

北里の桜便りはまだ先と

伊吹 之博

秋茄子